
少年アリス

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年アリス

【Zコード】

N4745F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

不思議の国のアリスをモチーフとした小説です。ほぼ全員が性転換しています。最初は、文章だらけで会話が少なくなると思いますが、後にオリジナルで進んでいきます。読みにくいかもしませんが宜しければ、不思議の世界へ・・・。

1

兎の穴に落ちる（前書き）

文章だけで、しかもお姉さんが、良いキャラしてます

1 魔の穴に落ちた

アリスは、土手の上で、お姉さんのそばに座つてゐるが、とても退屈になつてきました。おまけに、何もすることが無いのです。一度、お姉さんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、その本には、絵もなければ会話もあつません。

「変なの」

とアリスは考へました。

「絵もなければお話もない本なんて、なんの役にもたちやしないよ」

それよりも、アリスの今の姿を聞きました。

「お姉さん、どうして僕は……女の子の洋服を着てるの?」

「それは、可愛い……じゃなくて……萌え……じゃなくて……まあ仕方無いのよ」

変な単語が聞こえました。しかも、話を逸らしました。ですが、

アリスには何が分りません。

アリスの姿は、金髪で肩までの長さでサラサラで指通りがよさそうです。顔も女の子寄りで可愛らしいです。だけど、男の子なんです。

暇なアリスは、心の中で出来るだけ考えよつとしました。 といつのは、その日はとても暑かったので、眠くて頭がぼんやりしがちだったのです。 シロツメクサで花飾りをつくりお姉さんを脅かそうと思ったが、わざわざ立ち上がって立ち上がってシロツメクサを摘むだけの価値はあるだらうか？ と、そのとき、とんでも無いものがアリスの前に現れました。

「え・・・ウサギの耳をした女の子？」

赤い田にウサギの耳を着けてる（カチューシャとかじやないから生えてるんだと思つ）チョッキを着た美少女でした。

田髪で一つ結いの三つ編みが腰まで伸びてます。それだけなら、女の子に見えるがズボンを履いています。

それは、とくに驚くことではありませんでした。それにアリスは、その兎が。

「あつ~、あつ~、遅くなつちやうよ~」

と独り言を言つたのも、それほど不思議とは思いませんでした。（もつとも、あとでそのことを考えた時は、おかしいと思わなければならなかつたのだ、と思いましたが、その時は、『よく普通のことのように感じたのです』けれども、その兎が、目の前でチョッキの

ポケットから時計を取り出し、時間を確かめて、また先を急ぐのを見たときには、さすがのアリスも思わず立ち上がっていました。なぜといって、チョッキを着ていたり、そのポケットから時計を取り出したりする鬼は、まだ見た事が無いのに気が付いたからです。たちまち燃えるような好奇心にかられたアリスは、あの格好のまま野原の中を、兎を追いかけて走り出し、ようやくのことで、兎が、垣根の下の、大きな兎穴に飛び込む所を見るのに間に合いました。

次の瞬間、アリスもその穴に飛び込んでいました。どうやつてそこから出るのかなどということは、これっぽっちも考えませんでした。兎穴はしばらくの間、トンネルのようにまっすぐ続いていて、突然ガクンと下り深い井戸のようなどこかへ、グングンと落ち込んでいました。

井戸が本当にとても深かったのか、それとも落ち方がひどくゅうくつしていたのか、落ちていく途中で、周りを見回したり、これからどうなるのかと考えたりする時間は十分にありました。まず、下を見下ろして、どこへ行くのか確かめようとしましたが、暗くて何も見えません。次に井戸の回りの壁を見ると、そこは戸棚や本棚がいっぱいでした。所々に、地図や絵が釘にかかっていました。それには『オレンジ・マーマレード』というラベルが貼つてあったのです。けれども、それは空っぽで、アリスはがっかりしました。それでも、壺を下にいる誰かに当たつて死んだりするといけないし、と思つたので、落ちながら、戸棚の一つの上によつやくのことで載せました。

「さあて、これだけ落ちたんだから、今度は階段から転がり落ちたつて平氣だよね。家に帰つたら、みんな僕が、すごく勇氣があるってびっくりするだろうね！ そうだ！ 家の屋根から落ちたつて、一言も痛いなんて言わないに決まつてる！」

（これは、確かにその通りでしょう、屋根から落ちたのでは、口も
きけません）
下へ 下へ 下へ。こいつたいでじままで落ちたら止まるのか。

「もひへ、何キロぐらい落ちてきたかな？」

と、アリスは口に出して言いました。

「もう地球の真ん中辺りまで来たに違いない。ええと、やつすると、
六 キロ以上も来たことになるね」

（アリスは学校の授業のとき、こいつたことをたくさん勉強して
きました。だから、その知識をひけらかすには、聞いている人が誰
もいないのでから、あまりよい機会とは言えなかつたけれども習つ
たことを何度も声に出して言つてみると、いい復習になると思
つたのです）

「やうだ、たしかそのぐらゐの距離だよ。でも、緯度と経度とは、
どのがこなのかな？」

（実はアリスには、緯度も、何のことかわつぱり分らなかつたので
すが、いかにも立派そうな言葉なので、使ってみたのです）
やがて、アリスはまた喋り始めました。

「こまま落ちていくと、地球を突き抜けてしまうんじゃー・頭を下にして歩いてる人達の所へ飛び出したら、おかしいんだろうな！対アンチバチーズ

情地人ソウチバチーズというんだな」

（こ時にはアリスは、誰も周りに聞いてる人がいなくて良かつた、と思いました。どうも、正しい言葉のような気がしなかつたからです。注 その通り。本当は、anti-podes 対蹠地 アンチポーズ、またはそこに住む人間が正しいのです）

「でもそここの國の名前ぐらいは聞かなければいけないね。こには＝ユージーランドでしょうか、それともオーストラリアでしょうか、すみませんが教えてくださいませんか？」

アリスは喋りながらお辞儀をしようとした でも、考えてみてください、空中を落ちながらお辞儀をする格好を！ あなたは出来ると思いますか？

「きつとそんなことを聞くなんて無知な男の子だと思われるに違いない。そう、そんなこと聞いちゃ絶対ダメだ。たぶん、どこかに書いてあるから、それを見れば良いんだ」

下へ 下へ 下へ。他に何もすることが無いので、アリスはまたすぐに喋り出しました。

「ダイナが今夜、とても寂しがるね　僕がいないから。」

ダイナといつのは飼い猫です。

「お茶の時間に、ミルクをやるのを家の人気が忘れなければ良いナゾ。ああ、ダイナ！お前も、僕と一緒に来れば良かつたのに！空中には鼠はいないたううけど、コウモリなら捕まえれるかもしけないよ。コウモリは鼠によく似てるでしょ。でも、猫はコウモリを食べるかな？」

「」のあたりで、アリスはとても眠くなつてきました。それでも、夢の中でもうみたいて言ひ続けました。

「猫はコウモリを食べるかな？猫はコウモリを食べるかな？」

時には間違つて。

「コウモリは猫を食べるかな？」

と聞きました。といつのはアリスには、どちらの疑問にも答えられなかつたから、どっちにだつて同じ事だったのです。そのうち自分がだんだん眠り込んでいくのを、アリスは感じました。そして、

「ねえダイナ、本当にいいを聞いて。お前は「ウツモツ」を食べた事が
あるの？」

「じつ熱心に聞き始めた途端でした。こやなし、ズシン、ズシ
ーンとばかり、小枝と枯れ葉の山の上に落ちたのです。これで墜落
は終わりでした。

2 内気な白兎

アリスはかすり傷ひとつ負わず、すぐに立ち上がりました。上を見上げましたが、頭上は真っ暗でした。前を見ると、また長い通路があつて、さっきの白兎がまだ先を急いでいるのが見えました。ぐずぐずしてゐる暇はありません。アリスは風のように走り出しました。そして、ちよづど、兎が角を曲がりながら

「どいしょーー困ったよーーどんづん遅くなつてぐうー」

と叫びてゐるのが聞こえました。その声は可愛らしく優しい声でしたが、焦つてゐる声でした。

「あの・・・」

頭を抱えてる白兎に話しかけると、白兎は肩をビクンとさせ、こちらを見て言つた。

「だ、だれ？ 急がないとお・・・」

「『い、いめんなさい』。いは、じですか？僕迷つてしまつて・・・あ、僕はアリスです」

なるべく優しく話しかけると、白兎は少しだけホッとしたような顔をしました。

「わ、私はシロウサギです。」これは不思議の国です」

「不思議の国？」

シロウサギの言葉に謎が浮かんだ様子のアリスです。

「貴方は、不思議の国の人じやないのですか？」

「うん。君に着いてつたら落ちたの」

「あう！？私のせいですか！？・・・・お城に行かれては？」

「可愛い子・・・でもお城つて？」

と思つたアリスでしたが、またしても気になら單語が出てきて不思議に思つたアリスです。

「あ、歩いてれば見つかりますからーー！」

「どうだけ言ひどシロウサギは、どこかへ走つて行きました。アリスは、その姿を呆然と見るしか出来ませんでした。

「どうしましょうか・・・」

周りを見回すと、天井の低い広間で、天井から下がつた一列のランプで照らされていました。

広間のぐるりにはドアがありましたが、みんな鍵がかかっていました。アリスはそのドアを、あちこちと、みんな試してみましたが、やがて悲しげに真ん中へ引き返して来た時には、一体どうしたら外へ出られるのかな、と考えていました。

とつぜんアリスは、硬いガラスばかりでできた、小さな三本脚のテーブルにぶつかりました。上にはちっぽけな黄金の鍵が一つきりで、それ以外には何も載つていません。アリスは初め、これは、広間のドアのどれかの鍵かもしれない、と思いました。けれども、錠が大きすぎるのか、それとも鍵が小さすぎるのか、それはどっちにしても、どのドアも開きませんでした。けれども、一回目に周つて歩いていた時アリスは、先ほどは無かつたドアが現れています。アリスがその綺麗な黄金の鍵を錠に入れて試してみると　なんと、嬉しいことに、ピッタリと合つたではありませんか！

開けてみると、通路の先には真つ暗な闇が続いてました。

あまりの暗さに顔が引きつってるアリスです。

少し経つてから、遠くで微かにパタパタといつ足音が聞こえたので、アリスは慌てて顔を戻して、何が来たのか見てみました。シロウサギが帰つてくるところでした。立派な服装をして、片手にはキッドの皮手袋を持ち、もう一方の手には大きな扇を持っています。シロウサギは大急ぎでピヨンピヨン跳んで来ながら・・・。

「ああー！公爵夫人があーー！公爵夫人があーー。」んなにお待たせしたんじや、さぞかしあ腹立ちのことなんだろ？あーー！」

と言いました。恐怖のあまり、アリスはもう必死で、誰にだつて助けを求める心境になつていていたので、近寄つて来たシロウサギに向かい。

「あの、すみませんが　」

と、低い、怖々した声で話しかけました。シロウサギは再びビクツとして、白のキッドの手袋と扇をその場にバツタリと落とし、猛烈な勢いで暗闇の中へ逃げ込みました。

アリスは扇と手袋とを拾いあげましたが、広間がとても暑かつたので、喋り続けながら、扇で自分を扇ぎ続けました。

「やれやれー！今日はまた、どうしてこう何もかもおかしいんだろうー！昨日まではちつとも変わつたことは無かつたんだよ。ということは、夜のうちに僕が変わつたのかな？ちょっと待つて・・・僕は今朝起きた時、昨日と同じだつたかな？そういえば、少し変わつてたような気もするけれど。でも、もし僕が昨日と同じ僕でないとすると、問題だよ。僕は一体誰だろ？あー、これは実に難しい大問題だー！」

考えたアリスでしたが、浮かばずに結局、ドアの奥に進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745f/>

少年アリス

2010年10月28日00時53分発行